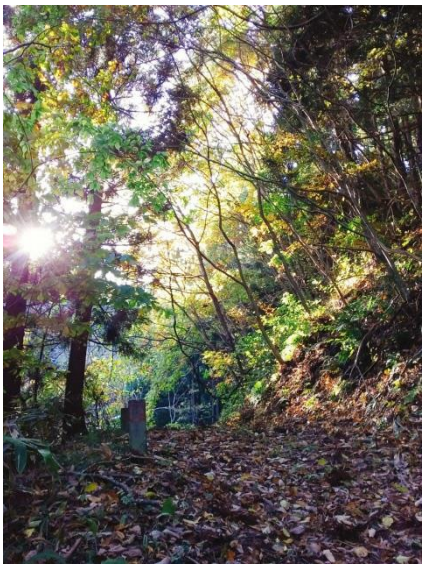
荒倉山

庄内平野の特徴的な地形の一つに海岸沿いの南半分が低山、北半分に砂丘があり、海に並行してやや小高くなっているところがある。おかげで、平野部までは海岸からの飛砂や風がずいぶんと抑えられている。そのつらなりの一つに、荒倉山がある。平野側から眺めると、一番目立つ高舘山が右側に見え、真ん中のあたりで存在感のある形をしているのが荒倉山だ。

荒倉山はかつて数多くの宿坊をかまえ、「西羽黒」とも称されていた。近世には馬頭観音を祀り農耕の守護神として庄内一円の農民などの信仰を集めた。昭和 20 年、作家横光利一が鶴岡出身の妻と共に数か月間ふもとの山口集落に疎開していた。横光は、最後の名作「夜の靴」でここで過ごした日々のことを日記小説風に残しており、鶴岡の景色を眺め「ここが一番日本らしい風景だ。」と述べている。荒倉山のことについても「三日も見ないとやはりもう懐かしくなっている。位のあるいい形の山の姿だと思った」と言っている。

昼過ぎころ、ふもとの金山公民館に自家用車を停め、登山口へと向かった。金山の集落内を歩いていると、水路を勢いよく水が流れ心地よい。集落を抜け、林道に入るとふと強い風が吹き、葉がわぁっと空を舞い、つい見とれてしまった。5 分ほど歩くと、森の散歩道のコース案内の看板が見えた。いよいよ登山道である。とはいえ、険しさよりも森歩き感の強い道を落ち葉を踏みしめながら歩いていく。登山口までの道と比べると、木が頭上に葉を広げているので少し景色は暗くなる。杉の葉が足元に積もってやわらかい。沢の音を聞きながら道を進んでいると、大きな葉が落ちている。トチの葉っぱだ。トチの実は、見た目はクリにも似ているが、大変あくが強い。鶴岡の特産品の一つであるとちもちの原料だが、簡単にはつくる事の出来ない一品だ。



トチの実は、水散布と言って、種が水に流されてたどり着いた場所で芽を出す、という戦略をとっている。山を歩いていると、谷筋で見かけることが多い。はえている場所は、水が流れていたり、岩が多かったり、水と関係している。

そんな沢沿いの道を進んでいくと、不動滝が現れる。そこも過ぎていくと、杉の木立の間の道になり、沢から少し離れ、静かになった。まっすぐのびる道は、前へといざなわれているような気分になる。

なだらかに高度を上げていくと、稜線に出たところでやや黄葉した数本のカラマツが出迎えてくれた。ここからは風景の印象がぐっと変わる。海風の影響か、細くてしなやかな中低木が多くなり、ぱっと明るくなる。葉も小さい物が多いからか、踏み音も少し明るい。森の匂いも、さっきまでは湿っぽい印象だったのが、一気に軽やかに変わった。森の変化にウキウキしていると、分岐に出た。そし

て、木々の間からは海がのぞいていた。下ると由良に出る。

見え隠れする海を眺めながら展望台に進む道は、マツの木が多くなる。アカマツは、やせた土地に多い樹種で、乾燥した尾根や岩場などに多く生育する。生えている樹種によってその土地の環境がわかってくる。ここは海風が当たるので厳しいのだろう、と想像できるだろう。

そうしている間に、いつの間にか周りは笹林に取り囲まれ、さっきまで森の中だったが、展望台が近づくと木の葉もすっかり落ちて木々も冬支度である。展望台からは、由良の集落を眼下に見下ろし、日本海がひろがる。由良海岸のシンボルでもある白山島もよく見える。標高約 70m で、頂上には白山神社がある。

由良は、出羽三山開山の祖、蜂子皇子が上陸し、修行のあとの羽黒に向かったという八乙女伝説の舞台だ。蜂子皇子は、八人の乙女、八乙女に導かれて上陸した洞窟「権現穴」で修業を重ね、由良の豊かでやさしい自然の営みに癒されて過ごしていたある日、出羽三山から立ち上がる清らかな光を見た。その後、荒倉山を越え、出羽三山へと向かったと言われている。

展望台のすぐ下にはほっとハウスという小屋がある。中は誰でも休憩できるように地元の人たちによって整備されているのだ。登山者ノートもあるので、訪れた記念にひとこと添えてみてもいいだろう。展望台から鞍乗峠への道のりは、やさしい里山の道と言う雰囲気だ。明るく、かといって騒がしくもなく、自分のペースで森に包まれながら歩くことができる。

「昔は農繁期を過ぎたころ自転車で荒倉神社に行って豊作祈願をして由良まで峠を越えて下りてから、宴会をしたもんだ～。」と話すのは櫛引の農家の方だ。「宴会が楽しみで面白かった」と祈願が目的か、飲み会が目的かもはやわからないが、それでも生活のサイクルの中に当然のように祈りがあり、しかも個人単位でなく、村の衆で豊作を願い集まり酒宴を開いていたというのを考えると、かつて人同士、地域同士が親戚とはまた違った特殊なつながりの中で強い結束をもって暮らしを作ってきたんだな、と思わせてくれる。

少し前に、鞍乗峠から荒倉神社への林道は大掛かりに整備された。というのも、ある年の春先に大規模に土砂崩れがあり、林道もろとも崩壊してしまったからである。以前は、海を眺めながらの道だったが、少しだけ内側に道は付け替えられた。新しい道を神社方面に歩いているとまた海が見えてくる。荒倉山の最高地点を眺めながらしばらく林道を歩くと、「チロルの小路」の標柱がある。横光利一の『夜の靴』の中に、妻と二人で鞍乗峠へ柴刈りへ行く晩秋の話がある。鞍乗峠から海は見下ろす草原の風景を眺めながら、チロルの草原を改装するシーンだ。そこから名づけられた「チロルの小路」である。横光のように、海へ向かって牛が放牧されている姿を想像するのも面白い。林道は途中、二股に分かれる。上へ行くと直接荒倉神社の本殿へ行ってしまうので、参拝の礼儀と思い、荒倉神社の入り口へ出る下から行く。杉の木立に囲まれた静かな池があり、空気がピンと張ったような雰囲気になる。池にかかった赤い桟橋を渡り、階段を上っていく。本殿へとまっすぐのびる

階段は格好いい。半分ほどのところに広くなっている場所があり、狛犬ではなく対の馬が献納されている。荒倉神社は保食大神、大宜津比売神（両方とも食べ物の神様）、古くは大国主命、事代主神とあり、総称して荒倉大神と呼ばれている。五穀をはじめ、食物、牛馬、蚕、動物の守護神で、特に古くからは馬の神として有名である。保食大神は、日本書紀に登場する。米飯や魚、獣を口から吐き出し、月夜見尊をもてなそうとしたが、月夜見尊は「けがらわしい」と怒り、斬り殺してしまう。これに怒った天照大神は月夜見尊とはもう会いたくないと言い、この時から太陽と月は昼と夜に分かれて出ることになった。さらにすでに死んだ保食神の体からは、牛馬、粟、蚕、稗、稲、麦、大豆、小豆が生まれ、民が生きていくのに必要な食物だとしてこれらは田畑の種になった。と言う話だ。保食神は、活躍のストーリーは少ないが、世界中に同様の殺された神の死体から人々に必要なものが生み出されるという話がある。五穀をつかさどる保食大神は、環境の厳しい自然豊かな庄内平野にとって大変重要な神であったに違いない。

昔、氏子らが石を担ぎ上げて作ったという階段を上りきると、2015 年に改修した新しい本殿がある。現在氏子は西目や油戸、上郷などに約 150 戸という。

本殿にて、西羽黒とかつて言われた信仰の歴史に手を合わせ、頂上へと向かった。本殿脇から下る新しい林道を降りたところに、山頂への登山口の入り口がある。これまでの道と違い、ここから頂上までは少し急傾斜が続く。広葉樹の中を通る登山道は、特に季節感を感じる場所だ。途中、奇形のブナが目に飛び込んできた。これは、別名あがりこブナとも呼ばれ、人為的、または自然災害などで樹木が途中から切られたり、折れたりしたところから新しい芽が出て、それが雪の重みに耐えながら成長することで不思議な形の大木となっている。

頂上は、それほど展望はよくないが広場になっていて、ゆっくり休むことができる。落ち葉の布団で寝転んでみる。木々に囲まれている感じが、秘密基地のようだ。コーヒーをゆっくりいれて飲むのにもいい空間である。自分だけの特別な時間が過ごせる。

山登りでの往復のくだり道でたまに思うのが、こんな急なところを登ったのか？と言うことだ。ここも例にもれず、そうであったので、あわてずに一歩ずつ下りたい。

今回は荒倉神社の参道から竹野浦集落へ下る。やや暗い杉林の道だ。あまり人が訪れないのか、枝葉が落ちたまんまだった。時間もだんだんと夕方に近づき、少し不安な気持ちになりながらであったが、きちんと作られた昔ながらの道は、長い時間をかけて人々が踏み跡をつけて来たんだな、と感慨深い。竹野浦の鳥居をくぐり、絞めていた靴ひもを少し緩めたら、車を停めている金山公民館まで歩かなくてはならない。
車道脇の道を、街灯に照らされながら歩いた。

今でこそ、車での移動が当たり前だが、隣の集落まで歩く、というのをしてみると、それぞれの集落の特徴もみえてくる。隣り合わせで似てはいるが、地形や登山口の位置、寺社によっても雰囲気は変わってくる。

竹野浦はそれぞれの家が近く、ぎゅっとまとまり、道はやや入り組んでいてはじめて来

たらどこを歩いているのかわからなくなりそうだ。隣の山口集落は、荒倉神社まで道路で行ける入口の集落だ。その道路が中心にとおっているからか、あまり集落の内部まで入り込んでいこうという気が起きない。生活はよほど住民と仲良くならなとみることはできなそうである。車を停めた金山の集落は、竹野浦、山口よりも生活感が見える。表の水路で野菜を洗っている人がいた。

3 つの集落に共通しているのは立派な門構えとどっしりした建物だ。かつて宿坊が立ち並んでいた時代を目を閉じ想像してみる。

荒倉山のふもとには、一時期 33 軒もの宿坊があったが、秀吉の時代、太閤検地へ反抗したため弾圧を受け、建物は焼き討ちにあってしまって残っていない。

太閤検地は、年貢の徴収の合理化のために行われた。それまで、所有者が複数いた土地を、耕地 1 筆ごとに耕作者を検地帳に記載して年貢負担者を確定したのだ。それまでの、共同から個へと仕組みを変えたのである。しかしながら受け入れる地域ばかりではないのは当然だろう。土地は誰かのものではなくて、その場所に暮らす人々共有のものと考え、共同体としての集落が成立していた。今でいう地域コミュニティで利害を共にして生きてきたのだ。弾圧は、かなり力を入れたものだというのは住民たちもわかっていたはずだが、それでも共有の財産を配分し、共同体でなくなることをあきらめられない住民たちは一揆という形で立ち上がったのだろう。

建物はなくなっても、荒倉山が住民のよりどころとしてある限り、どこか心の結束は今も続いているのかもしれない。

（文・写真　稲田瑛乃）